

ごとまでした。毎朝、消毒代わりに梅酢と支那酒を飲んで、体につけたりして、お寺の本堂で集団生活をしている避難民の母子達を見舞った。コレラで助からぬ母の枕元で幼児が遊んでいた、畳の上にはシラミが重なって部厚く這っているのを、手でかきわけるようにして、一歩一歩患者に近づいて注射をしたりしたが、翌日に行つて見ると母娘とも死亡している。今度は住職の役を勤めて、お経をあげる。兵隊狩りをまぬがれた若い人たち二十人位が火葬場の役をつとめた。この人たちの中でも数人倒れてしまった。私も発熱で倒れたが、岩淵婦長の注射のおかげで助かった。栄養失調ながらも、やっと引揚げる事が出来た。そして昭和二十一年十月十五日命ながら博多に上陸したのである。

満州での終戦抑留に耐えて

沖繩県 大嶺 真 三

昭和十年五月、私は上間辰彦氏（地方警視で沖繩県保

安課長）が満州国熱河省公署に赴任した後呼寄せられ渡航、熱河省警務庁警務課勤務となる。「世界平和の理想を胸に高き誇りをもって五族協和」のスローガン、若い我々は胸打たれる年令であり満州建国のために大いに役立つ人生を求めて希望に湧いた時代であった。

現地人になりきることが先決だと決意し、吉林省滨江省に勤務する間は民間人との交流を一倍苦労したつもりである。昭和十三年七月張鼓峯事件が起り、翌年五月ノモンハン事件が発生し、北満地区は緊縛した時があり、その後関東軍大演習すなわち北方より南方に部隊輸送のかつてない大規模なもので部隊の大移動であるため、国民は極度の緊張感におそわれたのは事実であり、私はこの大演習に直接間接に参加した。それは昭和十六年の中頃から約五か月続けられたと思う。昭和十六年八月大東亜戦争と呼稱し皇軍は破竹の勢いで香港占領、続いてマニラ、比島上陸と南方方面に進撃、日本国民は勿論満州在住の日本人も歓喜の声を上げたものである。

昭和十八年、ニューギニア守備部隊の玉砕に始まり戦況は我が方に利あらず、昭和十九年七月七日サイパン島

玉砕のころより皇軍は敗退の一途をたどる。戦況は最悪の情報を知ってかハルピン在住の現地人(満系)の我々に対する態度が変わりつつあった。私は職務に励み同僚や満系の朋友とは毎日のように団欒の日を過ごしていた。二十九歳のころ沖繩の母に結婚の話をしてしたが返事がきたので、二十年秋ごろ式を挙げる予定にしていたのであるが、運命の別れ途となるのを予測しない赤紙召集令状が届いたのである。

兵役猶予者まで来るべきものが来た、日本軍の敗退断末魔の兆候といえるのか、戦況は悪化の道をたどる。昭和二十年六月十三日沖繩海軍部隊玉砕、六月二十日沖繩部隊通信途絶等で戦局は本土空襲等で最悪の状態になる。かかる状況の中私は二十年八月一日、ハルピン駅頭で婚約者やその外多数の満系職員の見送りを受け一路新京行きの中の人となる。着いて直ぐ南嶺の大学(集合地)に到着入隊を済ました。所定の検査を受け部屋の片隅に身をよせてみたら、私より先輩の人も沢山居り、勿論第二乙種の二等兵ばかりで、この集団が日本国家存亡の秋に役にたつのだろうかと思ひそかに考えざるを得なかつ

た。

出発前に外出許可がでて新京市内で入った或る喫茶店の娘が前記戦況を察知しながら、「兵隊さん、人の噂によると関東軍の偉い人の家族が通化方面に疎開しているとの事ですが本当でしょうか、誰が日本人を守ってくれるでしょう、非常に心配です」と語る。これに答えるすべもなく店を後に市内に出ると、ハルピン以上に新京市の満人の対日本人に対する冷ややかな態度が目に見える。中心権力が失われつつある感がしたが、帰隊してみると同僚もその話でもちきりである。

来るべきものがそう遠くはない、どうしよう、部隊の解散が、否、逃亡の道しかないではないか、新京市より応召した人々は妻子のもとに逃げると云い出す。しかし警備は嚴重であるしその「スキ」もない、勇気のある三人位はその後姿が見えない。同僚の私たちとしては無事妻子のもとに帰りいくことを祈っていた。私もこれが最後かと思うと故郷沖繩にいる親兄弟のことが心配でならなかつた。なすすべもなく数日が過ぎた、応召して二週間目の八月十五日、全員集合で講堂に集まった隊長の言

葉で「大東亜戦争は降伏終結した」旨の発言があった。予期したことが現実として生れた悲愴な顔と顔、膝つきあわせて黙して多くを語らない同僚。何月か続いた栄光の頂点に達した日本国が今奈落のどん底に落ちた歴史的大きな事実であり、それに直面している私達である。

休戦でなく一方的なソ連参戦が今日の混乱状態をかもし出している。ソ連領内に連行か或は朝鮮経由で本国帰還か。と噂に噂をよんでいる中に、軍服着用で九月二十四日、新京駅に終結され貨物列車（二段式蚕棚）に乗車、アムール河を渡りブラコエを経て中央アジアウズベック共和国のアンダクレンに到着、各々幕舎に収容された。その間実に三十八日間を要した。その苦渋は筆舌に尽くせぬものがあり一生忘れられない。

各幕舎に割り当てられて四人一組の蚕棚板張りの寝台であり、一幕舎八十人位と記憶している。

私の作業場は製材工場の木工部に大橋準尉が班長で十人編成だった。慣れるにつれ椅子半分から更に一台半作れとノルマ・ノルマで追われ通しであって、行きも帰りも監視兵付きである。食料は悪く黒パン三百グラム。

大豆、砂糖根の汁等々で在ソ中、満腹したことはなかった。中央アジアは夏期こそ自然も人間に親切だが、鷹の峯に雪がおりるころは零下三十度にもなる。冬場の食糧事情は最も悪く、年配の人は冬蔭軍と栄養失調で滞在中十四、五人位死亡した。

幕舎も十月ころより五か月位ストーブを焚くが、片隅の天井は真白いものがみえるほど毎日が寒い日々を送った。抑留生活四年目の末ごろ、噂が噂を呼んで来年春ごろは帰国できそうだ、もうソ連領内にいる日本人も殆どダモイしたようだとラーゲルの幹部がもらしていたと云う。そういえば作業日程にもその配慮がされている感があると直感、それからの毎日は心のゆとりが出て嬉々とした日々で、一日も早く遠い沖繩の親兄弟と会うことを楽しみにしていた。

昭和二十五年三月中旬ごろ朝食後全員集合の知らせで中央広場に來たら、収容所所長がお前たちは近々の内に帰国できる命令が來たから身の回りを整理するようにとのことだった。瞬間全員が歓喜の声をあげて喜んだ。一生忘れることのできない一日である。苦しかった四年間

が吹っ飛んだことが今も脳裡に焼きついている。アングレン駅乗車直前に収容所裏山の亡き同僚の墓標に向かつて黙禱を捧げ、一路東方ナホトカへの車中の人となる。

四月三日、興安丸に乗船、四月二十五日舞鶴港に入港、五年間の捕虜生活の総決算をした。

郷里沖繩に帰り、外地引揚者協会に勤め昭和四十四年六月、サイパン島慰霊塔建立、更に翌四十五年一月、フィリピン群島ミンダナオ島に亡き邦人の慰霊塔を建立する。昭和五十七年七月から旧満州国竜江省方正県にある日本人公墓を毎年慰霊墓参を行い、亡き人々の冥福を祈っている。

思い出の記

静岡県 樋口 なつ

東京、深川で平和な家庭を持ち幸福な毎日を過ごしておりました処へ、知人・柏木さんより、満州の広大な地ハイラルで事業を始め忙しいので是非協力して欲しいと

の誘を受けました。私は寒さに弱い体質のため家族全員反対でしたが、主人は男としての度胸をして友情、そんな意味で单身、渡満いたしました。一年程立ち、友人の事業と離れ独立して多忙との事で、止むなく昭和十四年に渡満致しました。ハイラル二道街に夏は土建業、冬は材木運搬でした。国境に近いため、軍隊の町で外出の時は証明書が必要でした。日本人、満人、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア人の五族協和の町でした。材木運搬は馬車、牛車、二百台から三百台とつらねて行くのです。牧夫の食糧と牛馬の食糧を積み込み、塩、トウピン等々、大体三台に一人の牧夫で満人がタヅナを取って一か月一回位の往復です。奥地へと行くのです。善良な人達でした。五月五日の節句の日には使用人の中の頭達が馬車で迎えに来られ、二人で訪れて次々と御馳走になってお祝を共に致したものです。五月二十日頃、解氷期となりますと、ハイラル河に流木拾いが行事でした。肌寒い季節シューバーを刃に付けて見物に出掛けました。流木拾いの技術も大変、材木を拾うどころか流水の中に吸い込まれ命を失う危険もある見事な景観でした。ハイラルの夏